

## グローバル通信



2014/07/04

NO. 5

## 特集「入澤慶 インドレポート」

海城中学高等学校グローバル教育部

本校には留学制度がありますが、適用されるのは高校生であり、中学生は適用外となります。中学校にはもともと「留学」という概念がないのです。義務教育期間中は、どこか一校に在籍し、通学するのが決まりです。従って、海城中学校に籍を置きながら、国内外を問わず他の中学校、あるいはそれに類する学校に通学することはできません。所属は一校限りとなります。

では、仮にA君が海城中学校在学中にお父さんが海外勤務となり、家族で赴任することになった場合、A君はどのようにしたらよいのでしょうか。

その場合、A君は一旦海城をやめる、つまりお父さんの赴任地の学校に転学することになります。しかしその時、「再入学許可願」(書式は生徒手帳)を提出しておけば、再度海城中学校に入学することができます。このような状況が生じた時は、是非グローバル教育部にご相談下さい。留学の時も早めにご相談下さい。

さて、上記のような事情で中学3年の終わりからインドのインターナショナルスクールに転学した生徒がいます。入澤慶君です。入澤君は高校1年の4月からは本校の留学制度によって留学扱いとなり、高校2年の4月からは短期留学に切り替えています。6月に一時帰国した入澤君は高校一年間の留学終了と高校2年生への編入試験（レポート提出と面接）を受け、それぞれ認められました。その時提出されたレポートをここに掲載致します。なお、入澤君は7月にはまたインドへと旅発ちます。

インド体験レポート

高校2年 入澤慶

インドで生活を始めて、一年半が経過した。インドの生活はこれまでの香港、バンコク、日本の生活と大きく異なる点が多い。「インドで生活できれば、世界中どこの国でも大丈夫。」と言われている様だが、これまでの三ヵ国と比べると、確かにハードシップが多い。普段は学校と家を往復するだけの生活を送っている私でさえ、困難を感じることが多々ある。先ずはインドを紹介する目的で、私が特に強く感じるネガティブな点（注意しなければならない点）を四つあげたい。（インドに旅行される際には、以下の四つに注意してください。）

## • 大气污染

ニューデリーの冬は、風がなくなり、湿気が高くなるにもかかわらず、雨がほとんど降らない。この時期の大気汚染は中国よりもはるかに深刻な状況となり、朝方はほこりが混ざった霧が滞留し視界が悪くなるほどだ。学校では外出を極力控える様アナウンスがあり、外の授業および放課後の活動は全て中止となる。家中の窓わくをセロテープで塞ぎ、一日中空気清浄器を使う必要があるのがこの時期だ（外気を遮断し風通しが悪かった為、家中カビだらけになった）。大気汚染は中国では大きな問題となっているようだが、ここでは全く問題視されていない（誰も気にしていない）。それどころか、大半のインド人はこの事実を知らない。これが最も大きな問題点であると私は思う。事実が認識されていない以上、改善されることもないからだ。

### ・ 寒暖の差

温氣の多い冬は最低気温が0度近くまで下がる（1月）一方、乾燥した夏は気温が急上昇し、50度近く

まで上昇する(6月)。過ごしやすい気候は3月中のみ。従って、革製品などの品質の低下が非常に早い。また以下に関連するが、冬場は寒すぎて、夏は暑すぎて、蚊が全くいなくなるほどだ。

- 病気（デング熱）  
8月から10月は雨期となり夏にいなくなった蚊が、大量に発生する。デング熱の季節である。この時期は外出する際は登校も含め、虫よけスプレーを全身にぬることになる。昨年は父の会社の日本人の一家族全員が発病し、うち一人は出血熱に悪化した。白血球の数が急激に減少し、特殊な輸血を行う必要が生じた為、父と母は病院に向かった。
  - 食料調達  
インドでは宗教上の理由から牛肉、豚肉を調達するのが困難となる。また、魚類についても、冷凍輸送等の技術がなく、内陸に位置するニューデリーでは入手が困難となる。従って、鶏肉ばかりを毎日食べる生活が続く。これまでの食生活がいかにも充実し・贅沢であったか身に染みて感じている。母は鶏肉料理のレシピにいつも悩んでいる。

次にポジティブな面をお話ししたい。私が考えるインド生活のメリット、それは学校生活だ。この国が現在大きく変化しようとしており、将来的に大きな可能性があることを、疑う人はいないと思う。そして人口12億の巨大国家の変化を、様々な国の友人とともに体験できることは、大変に貴重だと考えている。現在通学しているAmerican Embassy School (AES)は、その名前の通りアメリカ大使館が運営しており、場所も大使館の敷地の一部。この学校の特徴を日本の学校(海城)と比較すると、以下の様になる。

- ・ 沢山の国の生徒がいる（インターナショナル）。インドの首都ニューデリーの大天使館街にあるため、各国の外交官の子供が多い。様々な環境で育ち、それぞれの宗教を信仰し、考え方・意見も多様。特に歴史の授業では過去の国際紛争等に対し意見が対立することが多い。授業中の発言でも、生徒はみな差別的な言葉には大変に気を使う。（その一方で、教師は米国をひいきし、アジアの国々を下に見ていると感じられることが多い。）私は去年も今年も World Peace をテーマに、生徒会長に立候補した。「世界中の人々が集まるこの学校で、他国の文化・習慣・考え方（宗教）を積極的に理解し、ともに平和な世界をつくろう。」というスローガンで、演説も大変に盛り上がった。しかし結果は落選した。演説の最後に、We are the world を歌ったのが良くなかったのかかもしれない（音程も外れた）。この学校では、選挙結果（得票数）は発表されない。先生からは「もっと身近なことにトライすべき。」と言われた。
  - ・ 一つのクラスの人数が 10 人程度。先生の手が完全に行き届くため、生徒にとっては大変に贅沢な環境。但し、細かい点を質問し過ぎているせいか、少し私と距離をおく先生が最近始めた。
  - ・ 体育（スポーツ活動）やボランティアが重要な科目。数学や理科と同様に、スポーツ、ボランティア活動も卒業のために必要な単位となっている。また進学する際も、アメリカやイギリスの大学側は、その内容も重要視している。課外活動は季節ごとに三つのスポーツを選択できる。私は陸上、サッカー、バレーボールに挑戦している。少し自慢になるが、インド・中東諸国のインターナショナルスクールの大会（Middle East South Asia Conference）において、

陸上では200M走、400M走で優勝、100M走は2位、また、ミッドフィルダーとして出場したサッカーでも準優勝となった。一方、昨年から始めたバレーボールはベンチを温めすぎてお尻が痛かった。(競技の様子は、YOUTUBEで視聴可能。)

- 試験の結果より、プロセスが重視される。

期末試験の結果は最終成績の15%程度のウエイトのみであり、日々の研究(宿題)、プレゼン等の配分が大きい。これは、一発勝負が不得意な自分にはありがたいところである。

- 受講科目の選択が自由。

卒業するために必要な科目・単位は決まっているがその選択は本人の自由。1日に4コマの授業があり(1コマ80分)、二日毎8コマの授業を繰り返す。将来の希望にあわせ、スポーツや芸術をメインに選択する生徒もいる。

- 授業内容のメモ、宿題、成績通知等、全てパソコンにて実施。

パソコンはアップル社のマックブック・エアが支給される。故障した際の保険金としてUSD100を毎年支払っている。改めて考えると、鉛筆やボールペンで書くことがほとんどなくなった。

- 先輩・後輩の差別がない。

先輩に対しても、特別に丁寧な言葉(敬語)を使うことはない。生徒数が少ないせいか、先輩、後輩の区別なく皆とても仲が良い。日本に帰国して間もない頃、海城サッカーチームの先輩から「タメグチはやめろ。」と注意されたのが懐かしい。その時はタメグチという言葉の意味を知らなかった。(その先輩は他の先輩から悪い印象を待たれない様、親切に教えてくれた。) 実は先生に対しても基本的に対等な会話をしているが、これは英語表現の問題なのかもしれません。

この様に、日本の学校と異なる点、日本の学校では体験できないことが多い。海城で過ごした時間は確かに大変充実していたが、AESの学校生活も大変内容が詰まっており、ここでしか出来ない貴重な体験ができる事を幸せに感じる。授業内容に少し触れておくと、理系の科目は、日本とほぼ同様のアプローチ(テキストに従って進む)となるため、日本で購入した参考書が大変役立っている。一方文系の科目、特に歴史はアプローチの方法が全く異なる。日本のように過去から順序良く(大事な出来事を漏らさない様に)学ぶのではなく、現在の国際問題・事象の原因・背景を過去に遡って追及するアプローチとなる。最近のテーマは、ウクライナ問題、インドの選挙等だった。今のインドはなぜ発展していないかという課題も取り上げられそうになったが、インド人生徒に配慮して取りやめられた。

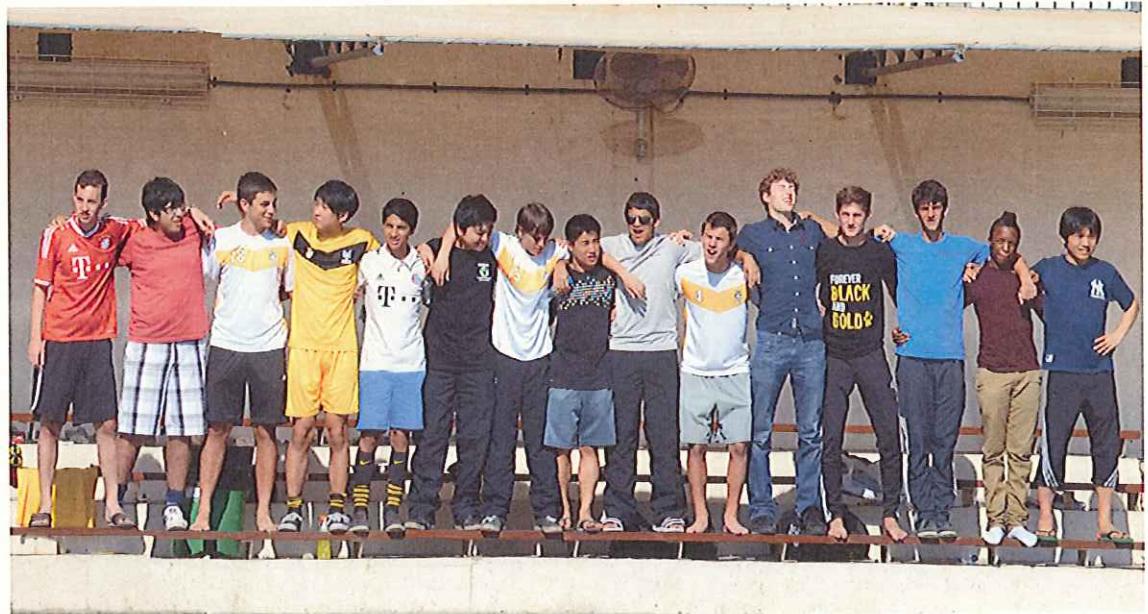
最後に、上記の結局取り上げられなかったテーマに関連して、1、インドの発展はなぜ遅れているのか、2、インドの貧しい人々は、なぜ立ち上がらないのか、それぞれ簡単に触れる。この2点は私がインドで最も強く感じた疑問点である。なぜなら、2005~2010年に生活したタイは、積極的に外国企業を誘致することで発展を遂げた。また、貧しい人達(赤シャツ)が地位向上のため立ち上がった。そしてその光景を身近で見たからだ。

- インドは世界最大の民主主義国である。人口の大部分を占める貧困層の社会的地位は大変低いが、民主主義憲法で選挙権(一人一票)が保障されている。従って、選挙は貧困層にとって自分の主張を堂々と

表現できる唯一のチャンスとなる。政治家は農民や貧困層への手厚い配慮をしなければ選挙に勝てないため、彼らに対する人気取りが先行し、彼らに不利益な政策は控えられる。例えば、中小の商店や工場で働く労働者の失業につながり易い外国企業の誘致は控えられることとなる。この仕組みが、インドの発展を妨げ、改革が進まない大きな原因となっている。大変残念だが、政治家が自分の利益(選挙での当選)を優先するため、経済改革が進まないのである。

- 更にもう一つ、インドの貧しい人たちが改革を望まない(タイのように暴動が発生しない)か、それは宗教に関連する。インドにはお墓がない。それはインド人の8割が信仰するヒンドゥー教は、人間は生まれ変わるものであり(輪廻)、現世だけが人生ではないと教える。そしてこの教えに有名なカースト制度が加わると、「現在の身分・職業に没頭し、上級階級に尽くせば、来世でより高い身分に生まれ変わることができる」ということになる。これらの考え方は、紀元前1500年頃インドに侵入したアーリア人によって作られたものであり、支配階級にとって大変に都合が良いものだ。私はインドに来て、宗教とは(ヒンドゥー教に限らず)、一部の権力者が自分たちの都合に合わせ、大衆をコントロールするために作られた側面があることを学んだ。そして、現在に至るまで大衆がそれに疑問を持つことなく信仰されてきたことを、大変不思議に思った。

大気汚染や病気に対する不安、困難な食料調達、過酷な気候等、インドの生活はネガティブな面が確かに多い。しかしその一方で、学校や社会において新しいことを学ぶ(インドならではの経験をする)機会も沢山ある。そして結果はともかく、決して悔いを残さないよう、私自身何事にも全力で取り組んできた。来年度からは、IB(International Baccalaureate)に挑戦する。6教科の選択として数学、化学、経済学をハイレベル、英語、日本語、物理をスタンダードにて受講予定だ。2年間のプログラムとなるが、もちろん、精一杯全力を尽くすつもりだ。そして、インドに来て良かったと実感できるような高校生活を送りたい。



サッカーチームのメンバー(右端が入澤君)